

大学運動部における中途退部学生の性格特性

築田 秀治* 平田 久雄*

Personality Traits of Students who Dropped out of Their Athletic Clubs

by

HIDEJI YANADA and HISAO HIRATA

(Department of Physical Education, College of General Education, University of Tokyo)

In order to obtain data for giving advice and instruction concerning athletic club activities with reference to the clarification of the personality of inapt students who had dropped out of their athletic clubs, the Tokyo University Personality Inventory (TPI) was administered to the students who were continuing their activities and who dropped out of their clubs.

Followings are the results obtained:

1. The result of the TPI of the continuing students showed that many of them were belonged to the normal range of personality, but for the dropped-out students there were many who belonged to the abnormal range.

2. For the dropped-out students, this trend was greater for the students who had lost their self-confidence in skill and who disliked the mood in their clubs, but it was less for the students who complained the shortage of study hour and who had transferred their belongings to cultural clubs.

3. According to the analysis by 2 Point Code method, the continuing students were less neurotic and had higher rate of hypomanic character than the dropped-out students; but the latter had more neurotic type students and, especially, remarkably higher rate of depressive type students. [Proceedings of Department of Physical Education, College of General Education, University of Tokyo, No. 5, 1~3, 1970]

緒 言

一般に、運動選手には、ある性格の特徴があり、あるいは要求されるということが認められている。この観点から、運動選手と非選手、あるいは、運動部に所属する学生と一般学生との間で、性格特性の比較が種々なされている¹⁾²⁾³⁾。しかし、運動部を途中で退部していく学生を直接扱った研究は、これまでに、あまりなされていない。しかも、現実には極めて多くの運動部で、退部者の数が入部者の中でかなり高い率を占めることが、大きな問題となっている。東京大学の学生約500名を対

象としたわれわれの調査でも、入学当初、何らかの運動部に入部した学生は、200余名にも及びながら、1年後にはその半数以上が退部していることがわかった。もちろんその理由は様々であろうが、ともかく運動部活動を継続しうるものは、いわゆる精神力あるいは根性があり、短期間に簡単に脱落するものは、人格的な弱さがあるとする考え方もありうる。退部するものは、継続できる学生と異なるパーソナリティであるからこそ、部の生活に適応できず、あるいは意志薄弱な性格の故に、離脱するのであろうことは、十分予想されることであろう。

本研究の目的は、運動部活動を途中で放棄したものと、継続しているものとの性格傾向を TPI

* 東京大学教養学部体育研究室

(東大式総合性格検査)を用いて比較し、退部学生の性格上の不適合性を究明して、今後運動部に入ろうとする学生や、退部しようとする学生などへの指導の一助にすることである。

対 象 ・ 方 法

東京大学教養学部に入学した男子学生約500名に対し、昭和42年2月、運動部への入退部状況とその理由を調査した。その結果に基づき、運動部活動を継続中のものと、退部したものとに対して、改めてTPI⁴⁾を実施し、回収された運動部継続者67名、退部者72名について、以下の手続きに従って整理した。

TPIの結果は、通常の手続きに従って採点され、個人毎にプロフィールに画かれた。プロフィールの曲線の高低は、各尺度の得点をそれぞれの標準得点(Tコア)に換算したときの高低を示している。プロフィールは当然各人各様の形を示すものであるから、集団の性格傾向を問題にする場合には、何らかの基準に従って分類するか、あるいは類型化して考察する必要がある。その方法として2けたコード法を用いた。2けたコードは基本尺度(1~9)と付加尺度(0)のうち、標準得点の高い順に2尺度をとり、その尺度を示す数字を並べて示すものである。ただし、該当尺度の得点が標準得点で55未満の場合にはそれらが被検査者の性格特性として著しい傾向とは認めがたいのでコード化しない。また2けたコードが標準得60点以上ないし70点以上の値を示すものと、60点未満の値を示すものとに分類し異常性の指標とすることもできる。このような方法は比較的簡単で、しかもテスト結果に表われた各個人の主要な特徴を損なわないので、一般にもっともよく用いられている。

結 果 と 考 察

2けたコードの得点段階による異常性の判定結果は表1の通りである。

2けたコードの2尺度がT得点の上で高い順に第1位と第2位がともにT得点70点以上の、平均から大きく逸脱したものは、継続者中にはわずかに1名(1.5%)であるのに対して、退部者に8名(11.1%)がふくまれている。同様に1位70以上2位60以上は、7名(10.5%)と8名(11.1%)、1位2位がともに、70から60の範囲にあるものは11名(16.4%)と15名(20.8%)でこれら多少とも正常域を逸脱しているものは全体で、継続者中には19名(28.4%)、退部者中には31名(43%)がふくまれて両者の間に有意な差が認められた。(p<.05)

退部者を理由別にみると、技術的自信を失ったもので、異常域に属するものが12名中9名(75%)あり、ついで部内のムードがいやになったからとするものでは、18名中9名(50%)で、この二群が異常域に属するものが多く、このような理由で退部するものには、性格的偏異者が多いと考えられる。一方勉強時間とか文化部に移ったものなどには正常なものが多いことが認められた。

次に2けたコードを尺度別にみると、表2の通

表 1. 2けたコードによる異常性の判定結果

		非 正 常 域			正 常 域	合 計
		異 常 域	境 界 域			
第 1 位 コードの標準得点	第 2 位 コードの標準得点	70 以上	70 以上 60~69	60~69 60~69	69 以下 59 以下	
運 動 部 継 続 者		1 1.5%	7 10.5%	11 16.4%	48 71.6%	67 100.0%
運 動 部 退 部 者		8 11.1	8 11.1	15 20.8	41 57.0	72 100.0
退 部 の 理 由 別	技術的に自信をなくしたから	3 25.0	3 25.0	3 25.0	3 25.0	12 100.0
	部内のムードがいやになったから	3 16.7	2 11.1	4 22.2	9 50.0	18 100.0
	勉強時間が不足するから		2 13.3	1 6.7	12 80.0	15 100.0
	文化部の活動を始めたから			2 25.0	6 75.0	8 100.0
	その他の理由	2 10.5	1 5.3	5 26.3	11 57.9	19 100.0

表 2. 2けたコードの尺度別度数と百分比

	運動部継続者				運動部退部者			
	非正常域		正常域		非正常域		正常域	
1 (うつ)	3.5	9.2%	8	8.3%	14.5	23.4%	7.5	9.1%
2 (心気症)	2.5	6.6	1	1.1	9	14.5	2.5	3.1
3 (ヒステリー)	1.5	3.9	2	2.1	4	6.4		
4 (強迫神経症)	7	18.4	6	6.2	7	11.3	7	8.5
5 (妄想型分裂病)	7	18.4	10	10.4	3	4.8	10	12.2
6 (破爪型分裂病)	3.5	9.2	10	10.4	5	8.1	9	11.0
7 (反社会性精神病質)	3	7.9	1	1.1	5.5	8.9		
8 (てんかん)	2.5	1.6	4	4.2	3	4.8	1	1.2
9 (そうつ)	2.5	6.6	10	10.4	4	6.4	5	6.1
0 (内向性)	5	13.2	10	10.4	6	9.7	7	8.5
欠コード	0	0.0	34	35.4	1	1.6	33	40.3
計 (% の 計)	19	(100.0)	48	(100.0)	31	(100.0)	41	(100.0)

りである。各人の2けたコードは、原則として2尺度によって構成されるから、これを尺度別に分類すると、各2に数えられるので、尺度別度数の計は人数の2倍となっている。ただしコード化されるべき尺度のT得点が55未満の場合には、これを欠コードの欄に1尺度を欠く者は1、2尺度ともに欠くものは2として集計した。表2によれば、非正常域の退部者に1から3までの神経症尺度の出現する度数は27.5(44.3%)であるのに対して、継続者には7.5(19.7%)しかふくまれない。また継続者は、正常域のプロファイルに、尺度9の現れる度数は10(10.4%)であり、正常域退部者の5(6.1%)と比較して、統計的に有意ではなかったが、多い傾向が認められた。これらのことから、継続者には、神経症的傾向をもつものは少く、一般にややうつ的な性格傾向のものが多いのではないかと考えられる。

要 約

大学運動部を退部した学生の性格上の不適合性を究明し、運動部活動に関する助言指導の一助とする目的で、運動部活動を継続しているものと、退部したものとに、TPIを実施し、結果を考察し

て以下の結論をえた。

運動部継続者のTPIの結果は正常域に入るものが多いが、運動部退部者は異常域に入るものが多い。退部者の中でも特に技術的に自信を失ったことと、部内のムードがいやになったこととを理由にするものに、その傾向が大であり、勉強時間や文化部に移ったものには、その傾向が小である。また2けたコード法による分析によれば、継続者は神経症的な傾向が少く、ややそう的な特性をもったものが、退部者に比較して多く、退部者は反対に神経症的な傾向をもったものが多く、特によくうつの傾向のものが顕著に多いことが注目された。

文 献

- 1) 平田久雄：MMPIによるスポーツ選手の性格特性，体育の科学，14，8，pp. 461-465，1964.
- 2) 野口義之ほか：運動選手の性格特性についての研究，体育学研究，2，5，1957.
- 3) Booth, E.G.: Personality Traits of Athletes as Measured by the MMPI, Research Quarterly, 29, pp. 127-138, 1958.
- 4) TPI研究会：TPI実施手引.